

昨年の3.11東日本大震災の一ヶ月ほど経った頃、気仙沼市のNPO 森は海の恋人の畠山重篤さんのもとに、フランスの高級ブランド、ルイ・ヴィトンから支援の手が差し伸べられた。

40数年前、フランス名産のブルターニュの牡蠣がウイルス性の病気で壊滅状態に陥ったとき、宮城県産の種牡蠣によって救われた経緯があった。牡蠣が大好きなヴィトン家のルイ・ヴィトン5代目当主は「今度はフランスが助ける番」と今回の支援が実現した。このニュースは、私の記憶の引き出しに「鶴の恩返しフランス版として記憶されていた。

気仙沼市の湾で牡蠣・帆立養殖業に従事する傍ら、畠山さんは「森は海の恋人」をスローガンに20年以上、漁師の植樹活動をしてきた。豊かな漁場を守るためには、まず山と川を自然に近い状態に戻さなければならない。

東日本大震災の大津波により、父親から受け継いだ養殖施設は全壊し、牡蠣を育てるための筏はすべて沖に流され老人ホームで母親を亡くした。

元CASのイギリス留学生の母親・倭文年江さんが、公立中学を定年退職後は、家が近い事もありポツと時間ができるとお茶をする事が多い。

ある日、話の流れから3.11以降たち上げたNPO10年アリガトウ・プロジェクトの話題になった。

そして、10年前、修学旅行で畠山重篤さんに御世話になった世田谷区立中学の障害者D組の元教師を含むメンバーが、元生徒に呼びかける文章が出来上がった。[次ページ参照]

現在、大学生や社会人になっている元生徒の間でキティーちゃんロゴ入りの七宝焼のバッジと、メッセージ・カードのセットが¥1000で販売する支援活動が展開されている。一方、倭文さんの元同僚だった宇野先生は、勤務先の新宿区の中学校でも畠山支援プロジェクト活動を拡大している。

現役の宇野先生の春休みを利用して、倭文年江さんが中心になって企画した気仙沼再訪が実現した。

畠山さんの自宅をよく知るタクシーで、ゆるい勾配の坂道を上りきると、東京出張とお聞きしていた黄色いダウン姿の畠山さんが、ひょっこりと現れ全員ビックリ。

10年前、倭文さんがスケッチと写真で纏めた冊子を、畠山さんは感慨深そうに見入りながら今は無き風景の記憶を辿るように時々目を閉じる。

通産省や外務省は文化交流と銘打って、日本のアニメやファッションなどの魅力を海外に広める「クール・ジャパン（かっこいい日本）」

戦略を発信している。

畠山さんは今年の2月、長年の森を守る運動が認められForest Hero賞を国連から受賞。

ルイ・ヴィトンから支援の申し込みがあった時、畠山さんは「日本には世話をかけた相手にお返しをする義理人情がありますが、それは世界共通なんだと思いました」と語っている。

「クール・ジャパン」に代わり、畠山さんの周りで国境を越えて展開されている「鶴の恩返し」のような「Feel Japan」民間外交が拡大される21世紀を期待したい。

[前ページの参照文]

世田谷区立八幡中学校 平成14年度卒業生のみなさまへ

元学生主任 宇野より子
元D組主任 萩原康子

3月11日の東日本大震災で、壊滅的な被害を受けた宮城県の気仙沼は、3年生のとき、修学旅行で一方ならぬ世話になった懐かしい地です。

私たちの学年は、観光が主の平凡な修学旅行では飽き足らず、東北地方で体験を中心とした修学旅行を行いました。

当時のことをまとめた文章を、添えたいと思います。

宮城県気仙沼大島は、2002年5月14日から16日まで、世田谷区の八幡中学校の90名の生徒達が修学旅行で訪れました。

生徒たちは、修学旅行に行く前に、気仙沼の牡蠣の養殖にはその背後にある森がどれほど大事かを学びました。修学旅行の初日に、自分たちが学校で種から育ててきた苗木を、傍に注ぐ川の上流にある宝根山に植えました。みんなで、「いつかこれらの木が大木になったころ、また会おうね」と誓いあいました。

宿舎は気仙沼大島国民休暇村。1日目の夜には、「NPO法人 森は海の恋人プロジェクト」の代表である畠山重篤さんに宿舎まで来て、生徒たちに直接、講義をしていただきました。畠山さんは気仙沼湾の牡蠣が絶滅しそうな危機に、湾の汚れの原因が森にあることに気づいて、牡蠣養殖を20年かけて再興した人です。「森は海の恋人」は活動のキャッチフレーズで、漁業の環境を守るために全国的に活躍されている方です。

次の日からずっと、信じられないほど美しい離島の気仙沼大島に滞在し、都会では味わうことができない素晴らしい体験をしてきたのでした。

養殖いかだでクルージングをしたり、グラスボートで海底を覗いたり、無人島探検、釣り、イカの塩辛作りなど、それぞれが自由に選んで体験しました。3日目の朝には地引網魚をして、とれたての魚のパーベキューの朝食を味わいました。そのすべてに、朴訥で優しい地元の方たちが関わってくださり、本当によくしていただきました。

それらの行事の全部に、D組の生徒は参加しました。教師たちの温かい見守りの中で、通常学級の腕白な生徒たちは、実によくD組の生徒の面倒をみました。それは大人たちの予想をはるかに超えていました。D組の生徒たちもまた、みんなと一緒にの場面になるとその隠された力を発揮して驚かせてくれました。楽しい自慢できる修学旅行でした。

「私たちの学年は、すべての行事をD組と一緒に出来て本当に良かったです」と卒業式で、代表の生徒が言いました。決して忘れることの出来ない、懐かしい思い出です。

MAPLE NEWS

2012年 Vol.68



宮城県農業高等学校
相 / 澤 / 和 / 久
Kazuhisa Aizawa



☆NPO仕事への架け橋、「私のしごと」作文コンクール文部科学大臣賞
☆TOMODACHI サマー2012ソフトバンク・リーダー賞

おめでとう!!

明日への一歩

私は将来、「顔が見える農業」を行い、地域の皆さんに「美味しい」と言ってもらえるような野菜や米を作っていくこと、そしてその野菜を食べて沢山の笑顔が生まれるよう、農業に愛情を持って生産していくことが大きな夢です。夢への一歩として、私は宮城県農業高校に入りました。

私の家は、名取市で稲作約4ha、野菜7a、ハウス4棟にわたり、約30種類の野菜や果樹を栽培している兼業農家です。私は幼稚園の頃から祖父や父と一緒に、つなぎ服を着て畑を耕したり、種まきをしたり、コンバインに乗って稲刈りをするなど、農業に時間を費やしてきました。鮮やかな緑に包まれた田園特有の風光は、まるで絵に描いたような輝きに満ちており、自然の恵みを至る所に感じることができ、私は昔から好きでした。

しかし平成23年3月11日。マグニチュード9.0国内観測史上最大の地震は巨大な津波を引き起こし、各地の浜と街を呑み込みました。我が家の田んぼも今回の津波によってほとんどが流されてしまい、現在では米をつくることができません。また、名取市にある宮農校舎も今回の津波によって、先輩方が育て上げた農業生産物を始め家畜や施設、畑など、全てが流され壊滅的な被害を受けました。宮農に入学したら、農業を基礎から勉強し、研究・実践しようと考えていた私にとって、この現実を受け入れがたい、とても悔しい出来事でした。

※中面へ続く

